

小児急性白血病人の神経学的所見及び心理検査からみた晩期障害－5施設におけるP－Fスタディの総括

(分担研究：小児期白血病患者の生存の質改善に関する研究)

赤塚順一¹, 島崎晴代¹, 星 順隆¹, 小林尚明¹, 植田 穰²,
山本正生², 前田美穂², 桜井 実³, 神谷 斉³, 樋口和郎³,
加藤充子³, 月本一郎⁴, 有本 潔⁴, 滑志田ひとみ⁴, 宮野史子⁴,
鞭 熙⁵, 宮本信也⁵

要約：小児急性白血病人の晩期障害を本研究班に所属する5施設の総数57名についてP-Fスタディを施行し、その攻撃方向、反応型について分類した。10歳以下の患児では、大部分が外罰方向で占められ、自己防衛型、要求固執型にほぼ半数ずつ分類された。11歳から12歳では外罰傾向がやや優位を占めたが、残りは内罰と無罰方向に分類された。13歳から15歳の群では、外罰方向がやや優位を示したが反応型は、自己防衛型が大部分を占めた。ただし検査結果と実際の面接で受ける印象には差があり、検査結果をふまえた上での面接療法の重要性が痛感された。

見出し語：急性白血病、晩期障害、P-Fスタディ

1. はじめに

小児急性白血病人の心理検査からみた晩期障害に関しては、すでに昭和62年度の本研究班において報告してきたが、今回はさらに検討対象を拡大するために本研究班に所属する5施設の該当患児について心理検査を施行したのでその結果について報告する。

2. 研究対象

慈恵医大、日本医大、三重大学医学部、東邦大学医学部、自治医大小児科で経過観察中の小児急性白血病人で、治療開始後3年以上の生存例57名を対象とした。患児の年齢は8歳から15歳に分

布していた。

3. 研究方法

P-Fスタディ(欲求不満度)検査を施行し、攻撃方向、反応型を分類した。

4. 結果(表1、2)

10歳以下の患児10名では、攻撃方向はほとんど外罰方向(80%)で占められ、反応型は自己防衛型5名、要求固執型5名とそれぞれに約半数の患児が分類された。

11歳から12歳の16名では、外罰傾向を示したものが7名(44%)でやや優位の傾向を認めたが、

¹東京慈恵会医科大学小児科, ²日本医科大学小児科, ³三重大学小児科,

⁴東邦大学小児科, ⁵自治医科大学小児科

表1

P F スタディ 検査結果 (5施設統合)

年齢	人数	E (外罰方向)	I (内罰方向)	M (無罰方向)
10才以下	10名	8名(80%)	0名	2名(20%)
11-12才	16名	7名(44%)	4名(25%)	5名(31%)
13-15才	31名	14名(45%)	8名(26%)	9名(29%)

表2

P F スタディ 検査結果 (5施設統合)

年齢	人数	O-D (障害優位型)	E-D (自己防衛型)	N-P (要求固執型)
10才以下	10名	0名	5名(50%)	5名(50%)
11-12才	16名	0名	14名(88%)	2名(12%)
13-15才	31名	0名	24名(77%)	7名(23%)

残りの患児は内罰方向と無罰方向に別れた。反応型は自己防衛型が14名(88%)で大部分を占めていた。

13歳から15歳までの31名では、攻撃方向は外罰傾向は14名(45%)ほぼ半数を占めたが、残りは内罰方向に半数ずつ分散していた。また反応型は自己防衛型が大部分を占めた。

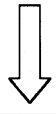
以上の結果をまとめると、10歳以下の患児は、敵意を外に向け、自我を強調したり、解決をはかるため他の人に依存し救助を求める状態にあり、11歳以上では、攻撃方向は敵意があってもうまくはぐらかしたり、良い子供であることを周りに印象づける方法をおぼえ、一方自己主張も強くなっていく傾向が伺われた。

5. 考察

患児の一人々々に検査を施行してみると、検査結果と実際の面接とはかなりの違いがみられた。面接では温和しく、外に敵意を向ける状態はみら

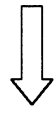
れず、穏やかな様子で大人からも好感をもたれる患児が多いが、検査上では欲求不満が強く自己主張をするタイプがみられた。

患児らは入退院の繰り返しによる社会性の乏しさや経験不足によるものが検査と面接の違いにもはっきり出ていて、今後治療と共に、患児らの精神面を細かく配慮し、積極性をうながすべく助言する必要性が感じられた。そのためにも個々の患児への面接療法の必要性が痛感された。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約：小児急性白血病患児の晩期障害を本研究班に所属する 5 施設の総数 57 名について P-F スタディを施行し、その攻撃方向、反応型について分類した。10 歳以下の患児では、大部分が外罰方向で占められ、自己防衛型、要求固執型にほぼ半数ずつ分類された。11 歳から 12 歳では外罰傾向がやや優位を占めたが、残りは内罰と無罰方向に分類された。13 歳から 15 歳の群では、外罰方向がやや優位を示したが反応型は、自己防衛型が大部分を占めた。ただし検査結果と実際の面接で受ける印象には差があり、検査結果をふまえた上での面接療法の重要性が痛感された。